

我武者羅

「親孝行をしてらっしゃい」と飛行機の切符をプレゼントして飛行機まで送ってくれた夫は「早く帰って来て」とほほ笑みながらも寂しさを隠さなかった。その夫に感謝しな

私の履歴書

子 恵 岸

②

夫に女性の影 離婚を決意

見抜いた娘が失踪 思考止まる

がらも、日本へ、米国へと私の不在はいつも長引いた。

私の不在が重なった頃、頭が良くて優しく、私より華奢で離婚歴があり「子供2人の親権さえ奪われてしまった」とメソメソ泣きながら私に訴える女性が夫の事務所に入りますようにになった。私は胸

を開いて彼女を迎えていた。

パリから南へ120キロほどの別荘で夫は「火星人」という短編科学映画を撮っており、十数人のスタッフが別荘に泊まり込んだ。パリの料理人など家事熟練者たちをそこには連れて行かず、私がすべてを取り仕切ることにした。

パリでは役立たずの主婦のうつぶんを晴らし、農家の女将さんたちに手伝ってはもら

んて考えもしなかった。

夫は結婚前のガールフレンドたちを隠さずに紹介してくれた。知性がきらめく明るくてしなやかな強さを持つ魅力的な人々だった。けれど例の女性の頭の良さにはうかがい知れない歪なものがあつた。

それを見抜いたのは10歳の娘である。田舎の家に入

ったが、主食は私独りで作った。朝早く起きると俳優シャルル・ヴァネル（「恐怖の報酬」などに出演）がトーストを焼いてくれたりした。

私は幸せだった。身が持たないほど仕事があると私は生き生きとする。何にもするところがない状態は私をふぬけのようにむなしくする。例の女性がそこにもよく現れた。彼女が夫と特別な関係になるな

も夫もパリへ引き上げた日の夕暮れ、忽然と姿を消した。村中が騒然とした。夫はこの辺りで不可欠な人物だった。無医村であるこの一帯に病人が出ると、パリの仕事を放って駆けつけ、無報酬で治療した。ある時には機械に挟まれて肩に重傷を負った農夫をパリの医師仲間に見

て、夫は村中から慕われ、愛されていた。

大事な一人娘が姿を消したというニュースを知り、村人は狂ったように娘を探して

くれた。私の顔にはひと刷毛の生気もなかったという。

麦畑のあぜ道に娘の自転車がかかった車にさらわれたのか



夫と一人娘とくつろぐ（パリの自宅）

がみつくと娘を抱き取りながら、パリから飛んできた夫の懇願にもかかわらず、私は我武者羅に離婚を決意した。その日は1973年8月11日。41歳の誕生日だった。

とてつもないことが起きる

と私の思考は止まってしま

う。せつかに結論を出し、それに向けてまい進してしま

と私はおびえた。月が昇り、夜が更けた頃、隣家の広大な麦畑の中で打ちしおれて泣いている娘をその家の主婦が見つけてくれた。

親しかったその主婦から娘の傷心の理由を聞き、あまりのショックに体が凍えた。し

り込んだりした。長い沈黙の後、夫がボツリと言った。「僕は君の日本には到底勝てないと思った」

空はバカバカしいほど青かった。とめどない悲しみが私の心に散らばっていった。

（女優）